

46.乳がん治療経験者の性生活に対する戸惑い

青木早苗¹⁾、山脇京子¹⁾、藤田倫子²⁾

¹⁾ 教育研究部医療学系看護学部門、²⁾ 福山平成大学看護学部

1. 研究の背景と目的

乳がんは40～50代の中年期女性に好発する。この時期の女性のセクシュアリティは、自信の積み重ねによる安定的な面と、本人やパートナーの心身や環境の変化によって流動的な面が見られる。その上、乳がん治療は近年個別化し、かなり複雑になってきており、治療による身体的変化や有害事象・後遺症が性生活に影響し、性生活において様々な問題に直面することが考えられる。そこでまず、乳がん治療経験者が、治療後の性生活においてどのような戸惑いを体験しているのかを明らかにすることを研究目的とする。

2. 方法

- 1) 研究参加者：乳がん治療を経験した40～50歳代の女性で同意が得られた17名。
- 2) データ収集方法：半構成的面接法
- 3) 分析方法：質的帰納的分析法
- 4) 倫理的配慮：高知大学医学部倫理委員会の承認を受け、研究参加者に文書と口頭で説明し、同意を得てから実施した。

3. 結果

乳がん治療経験者の性生活に対する戸惑いは、5つのカテゴリーで構成された。以下、カテゴリーは《 》、サブカテゴリーは〈 〉、コードは[]で説明する。

乳がん治療経験者は、パートナーとの性生活において、《治療によるお互いの性反応の低下》に戸惑いを感じていた。自分の性反応の低下は、[パートナーの性欲に応えたいが応えられない]など、《お互いの気持ちを察するが、身体的苦痛があり性生活がしっくりいかない》戸惑いにも影響していた。また手術療法では、たとえ温存療法であっても、〈術後変化した乳房を見た後のパートナーの反応が気になる〉ことで〈性交に没頭できない〉と、《手術の痕に敏感になり性生活に踏み込めない》と語っていた。乳がん治療後は、大切な存在としてパートナーを認識する一方で、《治療を受けた自分を理解して、性交をしてくれない》ことに戸惑いを感じていた。このように乳がん治療経験者は、治療後の性生活において、様々な戸惑いを体験するが、[性生活については他者に聞きたくても聞けない]内容であり、〈性交再開時期が不明確〉など、《性相談をする環境がなく性問題の表出に躊躇する》ことにも戸惑っていた。

4. まとめ

治療後の性的適応には、本人だけでなく、パートナーの存在が大きく影響する。看護師は、治療がどのように性的合併症を引き起こすのかを理解した上で、乳がん治療経験者とそのパートナーのもとの性生活を加味しながら、個別的な性問題に関わっていく必要がある。そして、羞恥心を伴うと同時に個別差のある性の問題に対し、乳がん治療経験者とそのパートナーが、いつでも性相談を受けられ、戸惑いを表出できる環境と情報を提供できるように、チームでサポートしていく必要性が示唆された。